右前々も相觸候通、供之者大勢無之樣可被致候、

十二月

一右御書付同文言にて、寶暦九年迄毎年十二月に至、御觸有之、

〔憲教類典三ノ二御禮〕延享二乙丑年十二月廿八日

正月朔日

一大御所樣附、大納言樣附、

右之趣、面々於西丸年始御目見可被仰付候之間、御本丸江者二日ニ罷出、御禮可申上候事、但御太刀差上候面々者、例年之通、御本丸江可相納候、〔中略〕

延享二乙丑年十二月晦日、中務大輔殿、伊與守殿御渡、大目附御目付へ、

一正月朔日西丸之面々者、御本丸へ不罷出、正月二日不殘御禮罷出候筈ニ候、但奥醫師も、西丸之分者、御本丸へ正月二日罷出、御流頂戴之事、

右之趣被心得、向々江も可被申談置候、

〔天明集成絲綸錄一〕明和四亥年十二月

大廣間御禮申上候面々之持參御太刀置所疊目

一年始　中將御下段下より四疊目に置、三疊目にて御禮、　少將御下段下より三疊目に置、二疊目にて御禮、　侍從御下段下より二疊目に置、一疊目にて御禮、

四品御下段御敷居之内、一疊目に置之、板緣にて御禮、〔中略〕

右之通、大廣間にて御禮申上候面々、爲心得寄々可被相達置候、

十二月

明和五子年十二月

大目付へ